

日本画制作における「宇宙と自然」の表現の考察 —自作の原点を探る試みⅣ—

藤 崎 いづみ

キーワード：宇宙の花、量子力学、メディアアート、伝統と革新

1. はじめに

筆者は、2018年に執筆した「自作の原点を探る試みⅢ」では、日本画制作における自然界・自然現象・宇宙の表現の考察について記した。本稿は、その第2章として、同主題の表現研究と教育実践について述べていきたいと思う。それは、2018年度より本学芸術文化学群ビジュアル・アーツ教育の新規教育プログラムの開設に伴い、始動した授業科目「ビジュアル・アーツ基礎」の指導内容と、教育実践報告や、筆者にとって継続テーマである「宇宙と自然」を描く表現研究について述べていく。そこから、原点回帰を図り今後の表現・教育・研究への探求を目指すこととする。

この基点から新しい日本の時代に、新しくて古き良



藤崎いづみ作品①『宇宙の花Ⅱ』紙本彩色 91.0cm×60.6cm
「第25回記念 雪舟国際美術協会展」 国立新美術館出品 特選受賞

き、いつのときも色鮮やかで斬新な日本の美意識を見つめ見据え、これまでの筆者の専門領域である日本画制作において「宇宙と自然」という普遍的な主題の制作が、起点となりつづけるように願う。また、常に筆者がこだわってきた「桜」の表現も、「宇宙」という視点でさらに考え記述することを試みたい。

2. 宇宙と自然を描くこと

2-1 教育実践について

筆者は自身の表現研究である日本画制作のテーマにおいて、2016年頃より宇宙と自然を探究し制作してきた。その探究において、実は2018年春に開設した新規授業科目「ビジュアル・アーツ基礎」での教育実践から感性を深掘りし、考えていけると発想したのである。現に「ビジュアル・アーツ基礎」の指導を通じて、筆者は日本画領域の可動域を広げた。それは、「ビジュアル・アーツ基礎」を履修する新一年生の課題制作において、彼らがフレッシュな視点で「宇宙と自然」を表現し、筆者が、その情報と感性に共振し筆者自身の制作の発展と発見がある面白さである。

以下、授業概要についてシラバスを参考に記す。

「ビジュアル・アーツ基礎」は視覚芸術の幅広い表現分野について、技法や考え方を学習する演習科目である。それは「日本画」「立体造形」「映像」「テキスタイル」「平面デザイン」の5つの分野を、3週間ごとにローテーションして専門領域の教員が指導していく。

本専修教育のキモになる科目は、この科目と必修ガイダンス科目である「ビジュアル・アーツ入門」がある。どちらも一年次での履修が望ましく、なぜなら、一年次スタートから視覚芸術の幅広い知識と教養、概念を学修できるからである。また、この2つを体験学習して、本学芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修の教育の概要に触れることができるといえよう。

筆者にとり、教育体験から得た表現研究とは、新たな時代の教育を見直し拡大して主題として論説し、自身の日本画制作と研究に結びつけることから、思いがけない発展がある、と前稿では伝えてある。今回は、更なる確認の機会となったのである。ビジュアル・アーツ基礎の筆者担当の日本画領域については、以下、2018年ビジュアル・アーツ基礎教科書より記す。

概要

- ▶ 「ビジュアル・アーツ基礎」は視覚芸術の考え方を体験学修します。「日本画」という表現分野は、「ビジュアル・アーツ基礎」という学修にどの様にリンクするのでしょうか。ここでは日本画が伝統を活かしたグラフィカルな世界であるという認識と、日本の美意識・和紙空間・様式美、写実視覚表現、等々について触れていきます。

到達目標

- ▶ 日本画材「岩絵具」の特性・技法・筆使いの体験学習と、日本の美意識は「緻密・繊細・丁寧」であることを理解する。

備考

- ▶ 日本画はビジュアル・アーツ表現の、基となるベーシックな視覚芸術表現で、様々な表現に展開できる。様式美とデザイン、黒い墨線と和紙の風情、和紙の色を日本の色彩美で染め上げ、古の頃より日本の情景を伝え続けた総合視覚芸術の愉しさがある学問分野である。

第1日目 前提講義と和紙にふれて岩絵具の溶き方と技法を体験。「和紙にふれる」と「筆によるぼかし、かすれ」についてのワークショップを行う。喰い裂きによる和紙遊びと、渴筆描き¹⁾・引き染め²⁾・つけ立て技法³⁾による筆づかい遊びを体験する。和紙の風情と岩絵具の具の特性・技法・筆づかいを楽しむ。

- 1 和紙にふれ、和紙を喰い裂く。(一枚の和紙を筋目をつけて、引き裂く)を体験学修し表装、和額装から日本の文化を意識してみる。
- 2 岩絵具の具を溶き、基本色を用意する(丹、群青、白緑、朱、鮮光黄)日本画材は色の名前も綺麗である。
- 3 「ぼかし、かすれ」という渴筆描き・引き染め・つけ立て技法による筆づかい遊びを体験する。

第2日目 新鳥の子紙に和紙空間と日本のグラフィズムを意識してみる。和紙を岩絵具の具で染めること、面と線による表現世界を描く。

- 1 「宇宙」と「自然」をテーマに1回目の喰い裂きと和紙に、ぼかし、かすれ技法等々で筆遊びする。
- 2 「宇宙」と「自然」について考え、つくる。画面に自由にイメージデザインし、渴筆描き・引き染め・つけ立て技法を指導していく。
- 3 オリジナリティーを意識して、色彩美と空間をつくりあげる。自分のイメージする世界観の宇宙、自然、自然現象を観察も試みる。空、緑、海、等々の地球のリズムをみて「自分の自然博物学」を日本画でつくろう。

第3日目 仕上げと講評。「配色」「構成」「感性」を大切に、完成をめざす。和紙の色と日本の色彩美で「自分の自然博物学」を日本画で表現する。

- 1 仕上げの愉しさへ、「みて、つくる、仕上げる」みんなの作品をみたり、自分の作品を考えたり、お互いの作品を語ったり、表現とコミュニケーションを試みる。
- 2 日本の美意識は「緻密・繊細・丁寧」であることを理解して、グラフィカルでユニークで、独自性のある画面をB3に仕上げる。
- 3 日本画はビジュアル・アーツ基礎の他の表現領域にどうつながっていくか、

自身のやりたいこと。今回のテーマである自身の宇宙や自然は、どんな表現ができたのか、を作品プレゼンテーションする。(VISUAL・ARTS ビジュアル・アーツ基礎 2019年度版 2019:p.3-6)

この教育プログラムとして、筆者は視覚芸術分野の独創的な教育にチャレンジした。筆者の日本画領域の教育アプローチとして次世代のアーティストに、まず、伝えたいことを以下に挙げる。

和紙のつくりと構造は、デジタルメディアのディスプレイ上の画像処理レイヤー効果を彷彿させる。それは、日本の表装技術の裏打ち⁴⁾、裏摺⁵⁾、あいはぎ⁶⁾、ドーサ引き⁷⁾、日本画技法の裏彩色⁸⁾、等々の技とつながる感がある。これは和紙という支持体⁹⁾そのものが、生の和紙に様々な素材を幾層に重ね合わせたつくりであり、それにより墨や岩絵の具による技法で、効果的な画面を演出する特性がありレイヤー効果のように重層的と分析している。

これらから、日本の美意識の要素について考えてみる。日本において、人間の暮らしを豊かにした高度経済成長期の家電の技術発展や、情報化革命におけるテクノロジーの変革と進化は、日本の手仕事文化、手工芸、技術に垣間見られる「緻密・繊細・丁寧」のアイデンティティが紡いでいると考察する。それは、以下にヒントを得たからである。

わが国の表装・文化財修復の技術や、用いられている和紙や生麩糊などの素材は、非常に優れており、世界の文化財修理にも応用することができる多くの可能性を秘めている。(図解日本画用語事典 2007:p.121)

長い歴史の流れの中で、日本のこのころのあり方は変わらない。時代の流れの中で、磨かれつつ伝承されたこだわり、理を新しい時代の教育を、総合大学としての日本画教育として伝えていきたい。

2-2 表現研究について

前述したようにビジュアル・アーツ基礎により、筆者は日本画の可動域を広げた。ここで、原点回帰としての考察について前稿から抜粋する。

日本画材の岩絵の具は粒子状であり、膠を溶き合わせるにより細やかな印象を和紙に描くことが出来、筆者はその技法と岩絵の具の魅力に惹かれてやまない。加えて、日本の美意識は緻密、繊細、丁寧である。ゆえに日本画は、滲み、ぼかし、かすれ、等々の筆さばきと技法、画面の仕立て方により優美な日本の美点を捉えられる。又、琳派の手法表現としての「たらし込み」技法は、宇宙空間を表現するのに絶妙な効果をもたらすことができる。そして、宇宙の美を追求するのには、岩絵の具の粒子で「宇宙の粒子」の美を表現することがふさわしいであろう。(藤崎 2018:p.207)

思うに宇宙は、小さな粒の美しい集合体であり、もっとも巨大な自然物である。

ここで、理学博士佐治晴夫『からだは星からできている』を引用する。

この「宇宙背景放射」について、NASA が本格的に観測を行ったのは、一九八〇年代

末に宇宙に打ち上げられた探査機、〈コピー (COBE=Cosmic Background Explorer) 〉でした。〈コピー〉によって、「宇宙背景放射」は、宇宙創成の時の大爆発、すなわち「ビック・バン」の残り火だと言うことが確信されたのです。それは、全天から飛来する電波の強さが一様ではなく、わずかな変化があって、その変化が、現在の宇宙の大規模構造をつくるきっかけとなっている、という証拠を示していたからです。(中略) この研究をさらに精密に推進していったのが、二〇〇一年に打ち上げられた〈ダブルマップ (WMAP) 〉でした。これらの観測衛星から送られてくる電波の分布の中に、わずかな変化が発見されたことが突破口になって、宇宙誕生の秘密に大きく迫ることができるようになりました。つまり、観測された電波分布をもとにコンピュータシミュレーションを行った結果、現在、観測されている銀河の大規模構造とぴったり一致することが、わかったのです。それは、「宇宙のはじまり」について、実証可能な理論をつくる上で、エキサイティングな出来事でした。さて、この微小な変化のことを、「ゆらぎ」と呼んでます。きちんと言えば、ある物理的な量が、平均値の周りで、ゆらゆら変化している状況のことを指しています。(佐治 2007: p.38-39)

この定義からのインスピレーションとして、筆者は琳派¹⁰⁾の手法表現としての「たらし込み」技法¹¹⁾でこのゆらぎの変化の表情を筆にたくし、描きたい。岩絵の具を膠に美しく滲ませたり、粒子の大きさの違う岩絵の具を膠に浮かせる筆使いにより、微細な微差の宇宙の摂理である「ゆらぎ」を描くことが出来ると発想した。又、朦朧派表現¹²⁾でも、宇宙美観のクリエイションに適している。岩絵の具の粒子の大きさの違いは、朦朧派表現の空気を偶然に美しく和紙を染め上げ、和紙の特性を活かしたやわらかな光を発光させたエネルギーで、2次元世界に宇宙を仕立てるのである。

ここで、再び原点回帰としての考察について前稿でも記したが、「宇宙を岩絵の具で描く」技法事例を次に記す。

①十一番絵の具を、百番絵の具に沈ませて、時間の経過で和紙にゆらぎの変化を染み込ませ、仕立てるのである。

②朦朧派技法は、裏彩色に和紙の質感を出して水干絵具をぼかし染め、十三番から五番あたりまで筆で遊びたい。

つまり、宇宙を描くことは、岩絵の具の粒子と膠でのクリエイションの現象が、実に美しい宇宙を創造するのであろう。さらに引用する。

付け加えておきますと、この「ゆらぎ」という性質は、原子から分子を形成したり、それらが安定して存在するためには是非とも必要な宇宙の根源的性質であることが、原子、分子の研究からもわかっています。「量子力学」と呼ばれる物理学の分野で、基礎となる考えです。(佐治:2007:p.41)

そして、物理学の分野では、これ以上分解できない最小単位のことを「素粒子」と呼び、この素粒子を研究しているのが「量子力学」であるらしい事と、万物は「素粒子の塊」としてこの世に存在しているらしく、筆者は、そのような物理学のからくりを少しず

つ楽しみながら、実に美しい量子力学や物理学を筆により視覚化したいと思うように導かれた。

そして、この辺りのビジュアル化については、実に美しい量子学と物理学を日本画で描くと、未来へは洒落た世界と表現研究を掴めそうである。その上で、筆者が苦手な自然科学分野や理系の愉しみや面白さに、興味を持ちつつ視覚化したい望みの原点回帰としての考察については、以前に書いている。

自然科学はその不思議さを数式で実証することに醍醐味があるのだろう。日本画作品は風の向きも、雲の形も、水も、地球の色も、全ての自然の姿を様式美で表現していく。自然の姿はそんな単純の中に複雑な美しさがあると、伝えていく日本美術の醍醐味を実感する。そして、自然科学もテーマが豊かで、夢があり、創造的な学術だと思える。(藤崎 2015:p.120)

ゆらぎ→朦朧派技法や琳派技法で筆にエネルギーをこめて、いままでの技法を超えてみたい。筆者はそんな、美しい素粒子で構成されている宇宙を心の視点で鑑賞、観測して、美しい日本画材の岩絵の具で壮大な宇宙を作品化したい。

また、岩絵の具の粒子は、光の効果が反映される。和紙にはりついた岩は、ディスプレイ上の映像の粒子が素材であるメディアアートに類似性を感じる。それは、ディスプレイ画面との違いは、質感があり鑑賞の角度により光の効果で、様々な表情を演出する。その原理を佐治晴夫は、次にあげている。

(中略) 光が小さな粒々からできているという事実にあります。実は、光のエネルギーというものは小さな粒の中に閉じ込められていて、どんなに遠くまで飛んでいても変わりません。ただ、星からの距離が離れれば離れるほど、光の粒子は周囲に広がりますから、粒々の密度は小さくなります。そのために、全体としては暗くなるのですが、光の粒そのもののエネルギーは変わりません。(中略)「波の干渉」と呼ばれる性質です。ということは、光は粒であると同時に波でもある、ということなのです。この矛盾めいた事実の解明には、量子力学の知識が必要ですが、ひとことで言えば、光はみる側の状況や、どういう装置を使って見ようとしているかによって、つまり、見ようとしている相手に対して、自分の姿を自由に変える、ということなのです。カメラのレンズを向けられただけで相手も表情を変えてしまうように、「見る」ということが、相手を変えてしまうということなのですね。つまり、「自然界のものたち」は、みるものと、見られるものとが、互いに関わりながら、真実の姿を垣間見せているというわけです。(佐治 2007:p.214-215)

筆者は、最も精緻な映像とディスプレイシステムは、人間の目であろうと思っている。

ゆえに心のエネルギーでものを観察すること、心臓の発する周波数は、脳で思考し発する周波数より 5000 倍も発信力が強い¹³⁾。心の眼で見据え、人間の目からデータをスキャンして、また、日本の審美観をプログラミングし創造する。

ここまでの記述を想い、観測と鑑賞を丁寧に繰り返し、日本のこころを解釈できるよう

になりたい。そして、柔らかな日本の感性を描きたいと望む。きっと、ゆらぎは、朦朧派の筆運びで描いていけるようだ。そこは、以前の考察でも述べている。

究極の日本の内在する美の本質の考察と分析の文献としては、『陰翳礼讃』を上げたい。(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』) 美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える。夜行の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石の魅力を失う如く、陰翳の作用を離れて美はないと思う。これは、日本文化特有の光や陰、淡い曖昧な部分の美意識によりそっている考察と思う。(藤崎 2013:p.135)

限りなく奥深い日本の美を追うことは、様々な学問分野の情報や情緒を自身にリンクしてくれる。次に、日本の美意識にメディアアートとリンクして、ミクストメディアの新しい事例としての、光について述べるとする。

3. 自作品と教育プログラムのコラボレーション・アクティブラーニング

3-1 Bunkamura へのアウトプット

光の粒子と岩絵の具の粒子との、相乗りの美観にこだわって、自然観と宇宙観を教育実践としてアウトプットしてみた。

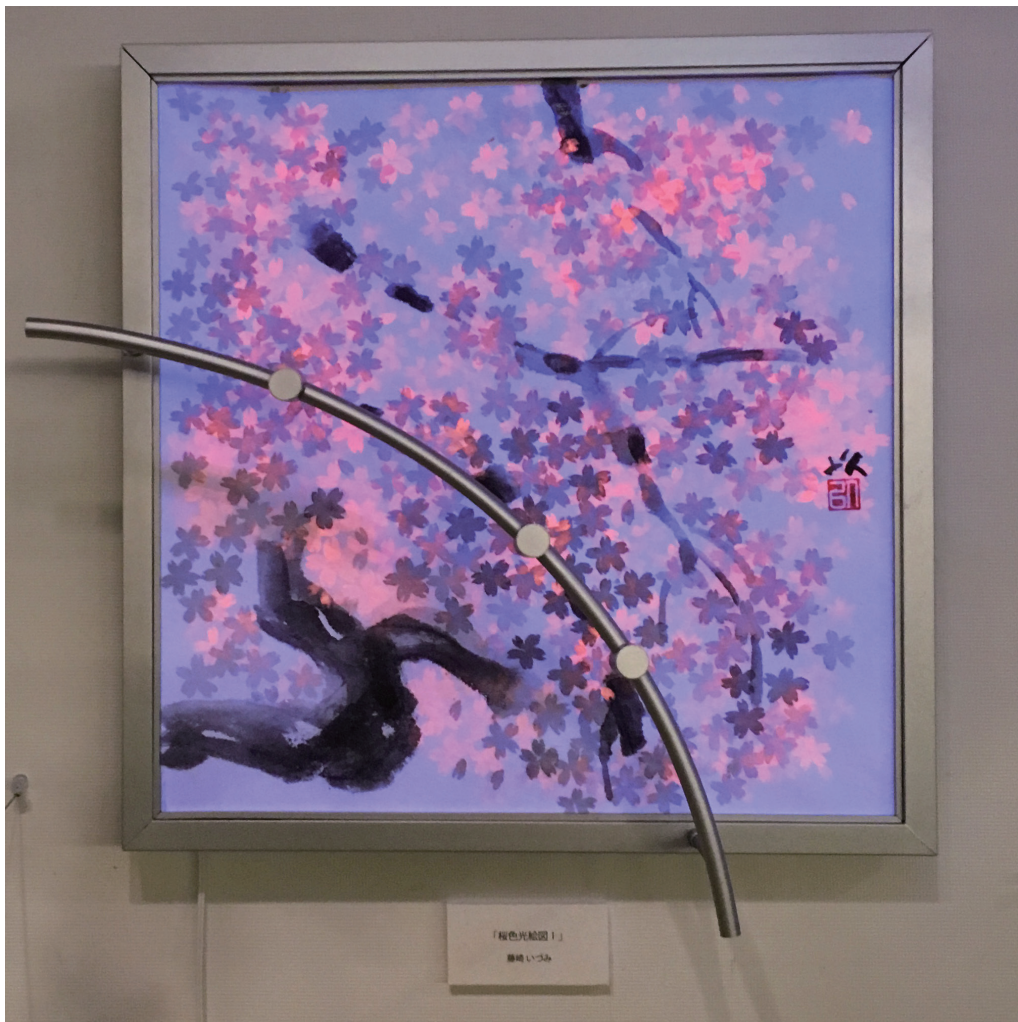
筆者が、新しくて古き良き日本の美意識を、教育の現場で伝えたいこととして、実践したのはビジュアル・アーツ表現教育の、学外に向けての発表である。それは、これまで筆者が行なったコラボレーション・アクティブラーニング¹⁴⁾の新しい試みに挑戦してみたことになる。そのコンセプトは、新時代の複合メディアの発信を、東京のど真ん中で放ちたい、という試みである。なぜなら、2020年を前に、東京都心はクリエイションエネルギーが想像に難くないと予想するからである。以下、2019年2月渋谷東急 Bunkamura Wall Gallery での「見えない光の桜吹雪 (HANA ふぶき) 展ブラックライトで仕立てる水墨画と日本画」展の概要である。

本企画は桜美林大学芸術文化学群3年生藤崎ゼミ(日本画)とデザインプロジェクトチームのコラボレーション企画と、担当教員による表現プロジェクトである。総合大学としてのグローバルな教育理念のもと、新しい芸術表現教育をアプローチしたいという発想が基点である。

また、これは、ビジュアル・アーツ専修(2018年度から教育改組に伴い名称変更)の、特色ある教育プログラムである基礎科目「ビジュアル・アーツ基礎」の担当教員の授業内容の「日本画&光アート」とも連動しており、先輩ゼミ学生から新しい教育組織で学ぶ後輩学生へむけてのメッセージ表現でもある。具体的には、日本画作品の伝統領域と光アート(プロジェクションマッピング)の革新領域の空間演出であり、画材は違うが、素材は光も日本画材の岩絵の具も、どちらも粒子であり、その混合技法であるミクストメディア表現といえる。これは筆者の日本画ゼミと同教育組織の田中敬一教授の授業のデザインプロ

ジェクト（ライトアート）とコラボレーション企画で、テーマは本学の名称にちなんだ「桜花」を表現した。

上記の概要から筆者作品とゼミ学生作品の日本画は、ブラックライトに反応する塗料（UV ペイント）と墨の混合技法作品を展示発表した。制作は、41.0cm のスクエア木製パネルに雲肌麻紙を表装した画面に、桜をモチーフに墨と UV ペイントで描く。視覚効果として、自然光空間では水墨画の画面のみが鑑賞でき、そこにブラックライトがライティングされると UV ペイントで描いた桜が浮かび上がり、満開桜がレイヤー効果のように現れる作品「桜色光絵図」が筆者作品である。



藤崎いづみ作品②『桜色光絵図』紙本彩色 36.0cm × 36.0cm

「見えない光の桜吹雪（HANA ふぶき）展 ブラックライトで仕立てる水墨画と日本画」展
渋谷東急 Bunkamura Wall Gallery 出品

又、ゼミ学生はブラックライトに反応するUVペイント技法での輝く表現は、多種多様で、桜の老木が池に映って光る風情や、都会のビルと桜並木の夜景の輝きや、龍と桜吹雪の瞬であり、若い感性に溢れている。

ゼミ学生の作品リストは以下である。

- ①「仰ぐ～摩天楼と桜～」大津柚月 ②「老桜と新芽」小笠原遥
- ③「お花見」崎川真香 ④「花鳥風月」鈴木優哉 ⑤「桜花」高杉伸二郎
- ⑥「華龍」中村優利 ⑦「桜舞う刻に」山崎由登 ⑧「Inspiration」若林奏子

加えて、田中教授プロジェクトの学生の作品は、ペットボトルの素材でクリスタル桜花の細やかな立体をつくり、そのエッジのUVペイントのふちどりがブラックライトに反応し、光り輝く枝垂れ桜のようなインスタレーションは日本画作品に華を添えてくれた。

また、田中教授のオリジナル照明器具の製作により、展示空間のブラックライトの点灯シーンと消灯シーンの照明効果を、最大限に引き出すため、オリジナルの紫外線照射器具を製作し、演出光をプログラミング（C言語）制御して光のコントロールをおこなった。（田中2019：p.12）

それにより、この展示空間では、作品鑑賞する角度や位置により、ブラックライトの変化により、鑑賞の美観は様々に楽しめ、先にあげた佐治晴夫の考察に通じた感覚の演出となった。

光は粒であると同時に波でもある、ということなのですね（中略）つまり、見ようとしている相手に対して、自分の姿を自由に変える、ということなのです。（佐治2007:p.241）

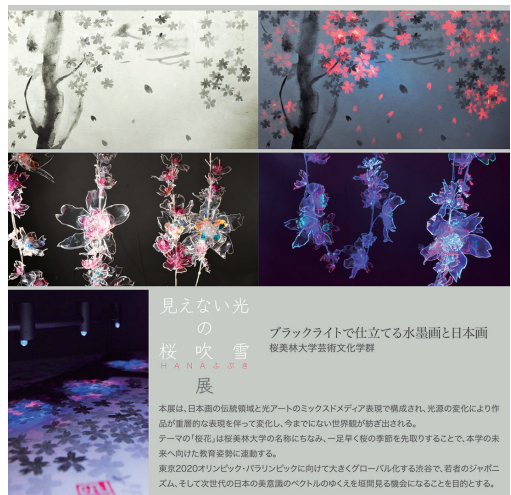
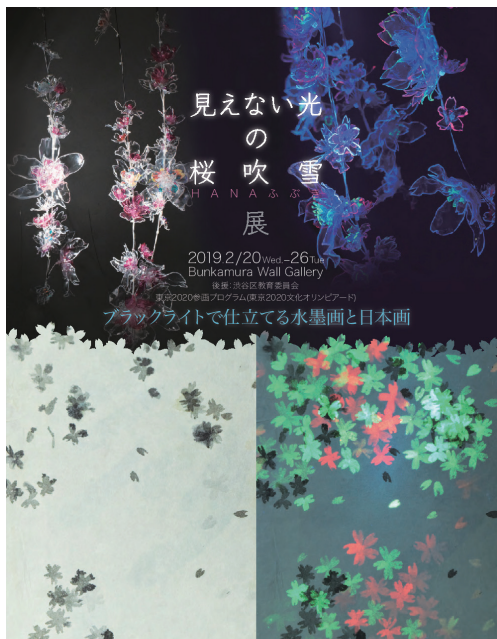
光が、自由自在である性質が3次元に変化する伝統と革新の光・空間演出で、それは、光により日本の美の絵画面が動いたメディアアート空間である。その魅力は、レイヤー効果をつくったこと。先に述べた和紙のつくりと構造の考察のように、デジタルメディアのディスプレイ上の画像処理レイヤー効果につながるといえよう。

上記に関連して、どの側面から鑑賞しても視覚を妨げない日本の伝統美意識が成立し、それは映像的な印象であり、また残像が繊細な世界をクリエーションできた。

また、本イベントは、田中教授のアプローチにより東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が推進する東京2020参画プログラムの「東京2020文化オリンピック」そして認証を受けたこと、渋谷区教育委員会の後援を得たことも光栄である。

筆者は、実は制作にあたり、意識したのは日本画材の墨と特殊塗料のUVペイントで宇宙的に自然感をどう筆で描けるか。更に、時間軸にのせた粒子であり波のような光でのメディアアート演習は、和紙画面で墨の粒子の光沢をどう魅せられるか、ということであった。

その上で、東京オリンピックに向けてグローバル化する若者の街の渋谷で若者のジャポニズム、日本の美意識を輝かせたい、との想いであった。同時に、メディアアートと手描き日本画作品の着地点は、手描きについての魅力である。「手で描く、書く」指の動きは、



主催：桜美林大学芸術文化群ビジュアル・アーツ専修

会場: Bunkamura Wall Gallery

会期:2019.2/20(水)~26(火) 10:00-22:00

会期中 毎日 10:00-19:00 製作担当の学生が展示説明をします

制作：芸術文化学群 デザイン・プロジェクトチーム、日本画・藤崎ゼミ

協力：壁画アーティスト、グラフィックデザイナー/谷口俊幸

監修:日本画/藤崎いづみ(芸術文化学群 教授)
光・空間造形/田中敬一(芸術文化学群 教授)

後援：渋谷区教育委員会

お問い合わせ: 桜美林大学芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修 田中

WEB: <http://www.obirin.ac.jp>

WEB: <https://www.oblinfo.ac.jp>

Bunkamura 

Wall
Gallery

Gallery
ンロビー702 東京都渋谷区道玄坂2-24-1

【WEB】<http://www.bunkamura.co.jp>

© 2000 Blackwell Science Ltd *Journal of Internal Medicine* 247: 395–402

水黒画と日本画 | 展

水壘田と日本田」展

ーチラシ

— — —

「見えない光の桜吹雪 (HANA ふぶき) 展 ブラックライトで仕立てる水墨画と日本画」展
 渋谷東急 Bunkamura Wall Gallery 展示風景とフライヤーチラシ

文字をキーボードで書く操作より、はるかに情報は脳にインプットするし、アウトプットするらしい。AI化が強くのしかかる未来に、物を捉える力、手で物をつくる日本文化の力を伝えていくこと、日本の伝統美の底力を若者が向き合うことが大切と考えた。

古き良き、新しい日本画を発信したい。総合大学としての絵画領域におけるミクストメディア表現は、メディアアートとしてクリエイションのアイデンティティを再構成していくことにある。

ひいては、筆者の表現研究においても日本画作品の新機軸が開き筆者は今回、作品制作において納得のいくまで何枚も書き直した習作により、視覚効果を実験した結果、プロジェクションマッピングにより、日本絵画の伝統を受け継ぐ側面を浮きぼりに出来たと考える。ゼミ学生とクリエイションを共振して、新しく古き良き、日本の美意識にたどり着いたのである。

3-2 国立美術館へのアウトプット

前項の3-1 Bunkamuraでのアウトプットを述べたが、ここでは、ゼミ的教育実践、つまり絵画領域（日本画表現）においての社会的アプローチの発信について記すことにする。3-1では、日本画領域のテーマの底には「宇宙と自然」を意識した「桜花」が在った。また「宇宙と自然」というテーマは1年生の入門科目「ビジュアル・アーツ基礎」の日本画の課題テーマであるため、先輩と後輩が繋がっていくビジュアル・アーツ専修の顕著な教育のカタチも連動している。

ここでの教育実践アウトプットとして、以下の事例も参考に挙げたい。

筆者の3年次アート系ゼミと同教育組織の向坂文宏准教授のデザイン系ゼミでは、毎年、合同夏ゼミ合宿を実施している。これは、日本のど真ん中の山梨県富士北麓で感じた、日本の自然観を見つけて作品化というテーマを継続しているのである。以下が夏合宿についての概要である。

合同ゼミ合宿では、山梨県富士北麓で甲斐絹染め資料センター、リネン織物工場、地場産業センターを見学視察しレクチャーを聞き、ものづくりの現場と日本の伝統文化に触れ、フィールドワークとグループディスカッションしグループプレゼンテーションを行う。

このコーディネーターは、筆者の大学時代の友人で、山梨の産業や自然に根ざした理念の環境デザイン会社（株）ネオスペース代表取締役樋口光仁氏と、地域産業を展開する街づくり文化企業（株）タンザワ堀内久雄氏によるものである。山梨で富士山を愛でること、そして日本文化の源流にふれることができる企画である。

日本人は自然と共生し、生きている。そんな思いが若い感性に浸透して欲しい思いから筆者ゼミでは、ゼミ合宿での自然観測をつなげて、以下のプロジェクトを発信した。

2018年12月12日（水）～23日（日）において、藤崎ゼミ（日本画）の学生の選抜5名が、国立新美術館で行われる「第25回記念 雪舟国際美術協会展」に作品を出展した。

それは、自然の壮大さやキャラクターをモチーフにした作品、水墨画など色彩豊かな日

本画を筆者作品と一緒に出展して、展示空間を共有したのである。また、同美術協会展において筆者出展の「宇宙の花Ⅱ」が、大賞、準大賞に続く特選を受賞したことも、心に刻まれる意義のある教育実践であった。ゼミ学生の作品リストは以下である。

①「Emeraid」簾内奈月

岩絵の具 / 雲肌麻紙 31.8cm × 40.9cm

②「玉藻前」高杉伸二郎

岩絵の具 / 墨 / 雲肌麻紙 51.5cm × 72.8cm

③「滝」若林奏子

岩絵の具 / 胡粉 / 金箔 / 雲肌麻紙 72.8cm × 103.0cm

④「共生」高見澤茗子

岩絵の具 / 墨 / 雲肌麻紙 72.8cm × 103.0cm

⑤「見知らぬ土地」山崎由登

金箔 / 墨 / 雲肌麻紙 36.4cm × 51.5cm

この美術協会展は「多種多様な作風が見られる公募展」をスローガンの絵画、書画作品を堪能する企画展であり、今回は学生出展として、桜美林大学芸術文化学群と東北芸術工科大学の学生の展示コーナーが設けられた。筆者は「宇宙の花Ⅱ」を描くにあたり、意識したのは、自身の感性で宇宙的視点から表現すること、である。また、会場の空間認識から、画面には大胆なエレメントのエネルギーを大胆に筆にこめたのである。

「宇宙の花Ⅱ」のコンセプトは以下である。

私の教育と表現研究も、ずっと続き

宇宙につながって

花を咲かせますように

そういえば、ブラックホールが撮影された記憶は新しいし、宇宙が身近に感じとれる昨今である。その上で、古のころから現在まで、そして未来まで宇宙は、どのように絵に描かれてきたのだろう。筆者は、どのような宇宙の花を描いていこうか、学生とセッションし感性を共振しつつ、そんな可能性を探るのが楽しみである。

4. 新作「宇宙の花Ⅲ」ー未来への発信

思うに、宇宙と自然をテーマのクリエイションを考えると、それを描くことは、実に夢が広がる。それを文字化、言語化することは、実は原点回帰につながる。

ここまでの記述と考察から、2018年に執筆した「日本画制作における『自然界・自然環境・宇宙』の表現の考察ー自作の原点を探る試みⅢー」から、また表現の可能性の可動域が広がったと、実感する。

以前、筆者は2012年度の卒業年次の学生と共に、自主ゼミを立ち上げ「フットボール」をテーマとして様々な事を分析・考察・論説し、学生自身の造形表現と研究に結びつける教育システムをつくり、実施した。いまでも筆者は、2014年度以降卒業生と新しい自主ゼミを立ち上げて、宇宙と自然を中心テーマに様々な語り論じたりしている。それは、日本の自然観、日本神話、3.11以降の東北の地域文化と農について、未来の夢と目標、制作や

作品について、当然、仕事のこと。最近は、ブラックホールの発見、素粒子や量子力学について、等々の議論に進んでいる。その自主ゼミの在り方は2012年からの今、あれから7年後の今のステージは、確実にアップデートした情報デザイン教育の現場である。なぜなら、2019年春学期の現在は大学業務はペーパーレス化の試みにより、様々にメディア化に移行しつつある。つまり、筆者の新しい自主ゼミの有り様も、よりオートマチックにe-Learning教育として更新している。それは、筆者の制作と研究とコラボレーション・アクティブラーニングのアウトプットの発信も、表現も媒体もバージョンアップしている実現化に見れるメディア・デザイン教育といえよう。

それは更に、宇宙と自然観というフィルターで、相変わらずLINEで繋がり、そこに筆者はさりげなくアプローチし指導と助言をしている。その関係性は、同等の立ち位置で語ることを大切にしつつ、そのディスカッションの中身は、思い出話しや、回顧的な話題は皆無に近い。アクセスするのは、常に常に今と未来である、その意義と必要性は、以下と推察しているのである。

若者は情報を持ち、メディアリテラシーに詳しく、時代的な感性が高い。ビジュアル・アーツ表現教育と視覚芸術は、時代を意識して、常に未来のクリエイションの感性につなげることが大切である。更に、現代の若者の特徴は、凄まじく多様化するデジタルメディアに実に器用にアクセスし、それを遊び、そして学ぶスキームを持っている。遊び感覚がハイスpekである。ここで、まとめの考察としても佐治晴夫を引用してみる。

人は、根底から変わることはできません。ただ、考え方の枠を広げて、新しい思考のパラダイムを構築することが、成長への第一歩になるということです。(中略)このことを、科学の分野の例でお話ししますと、十七～十八世紀にニュートンによって確率された古典力学は、私たちの身の周りで起こっている日常レベルの自然現象であれば、実にきれいに説明してくれます。しかし、対象が、宇宙の創生であるとか、原子、分子など、ミクロの世界のことになると、古典力学の考え方は、まったく通用しなくなります。そこで、二十世紀に新しく生まれたのが、相対性理論と量子力学という学問分野でした。ところが、ここで大切なことは、それではニュートンの力学は間違っていたのか、といえ、決してそうではないということです。相対性理論と量子力学は、その体系の中に、ニュートンの力学をうまくとりこんでいます。たとえば、相対性理論の中で、今まで考えられてきたように、光の速度が無限大であると仮定すればニュートンの力学になるというように、新しい理論は、古い理論を包括しています。これが、“考え方の枠を広げる”ということです。(佐治 2007: p.116-117)

この考察により常に自分の枠を外して、表現のプロフェッショナルであり続けることの大切さにたどり着いた。

いつの時代も、教育によって育まれる教養は、学ぶべき者と教える者の共存性により、生産される。それにより、指導者は予想外に感性や思考、概念、“考え方の枠を広げる”事が出来、幸福感を創り出し学生も新たな発見によって幸福感を獲得する。それは、筆者

の専門分野が伝統的な世界だからこそ、革新的な感性を磨くために必要なことであろう。

学生と教育者は、共存していく事が大切で、信頼し連携していく。教える者は、指導や教材に関し、時代に即したアイデアの応用が必要であると思う。(藤崎 2012:p.159)

教育の楽しさについては、冒頭で述べている。若者の感性は、時代に値する何か必ずある。視覚芸術教育は、循環するから意味がある。それは、様々な表現が循環する「ビジュアル・アーツ基礎」の科目のようでもあり、画材においても可能なミクストメディア技法のようである。

筆者は、古き良き日本の美意識の中に、斬新な日本の美意識を見つめ見据えたいと望む。その制作理念のために、筆者の教育の向き合いかたは未来にむけて、考え方の枠を広げられ画風の枠組みも広げられそうである。

ここで、自主ゼミ 2014 年度卒業生の小松崎君の LINE メッセージを記す。

そして量子力学の観点では、目で意識して観測した時に今という確率が確定します。(中略) もし目に見える世界が物質ではなくせわしく動く波動やエネルギーが絶え間なく移動していたら、時間などわかりません。時間とは、量子力学ではその無限に存在するエネルギー現象の確率から、人間の観測によって物質化(可視化)しているため、それが時間という意識が発生しているのでは。

上記の LINE 送信されたメッセージの最後にある、「物質化(可視化)」という無意識の文字化は表現の原点を捉えている。

そして又、繊細な感性の持ち主である彼が無意識に自然を映したフォトは、絵画的である。筆者は、その写真作品から地球の自然観測の表現を試み、宇宙の視点からの作品に仕立てた、新作「桜と宇宙」を制作進行中である。華やいで咲く、日本の自然と美を若い感性とつないでアウトプットしてみる。

このようなメディアアートから手彩色作品への制作プロセスについては、先の論文執筆した「日本画制作における『自然界・自然環境・宇宙』の表現の考察－自作の原点を探る試みⅢ－」(藤崎 2018 : p.215) で、映像プロデューサーの写真作品を筆者が水墨画表現にリ・デザインした経緯を述べた。様々なコラボレーション企画が実現した試みによる経験は、いまここで新たな展開に光が差している。

つまり、日本画は伝統的だが革新も必要で、教育プロジェクトでの気づきはコラボレーション・アクティブラーニングとか、教育組織が基点となりえること、それにより、複合メディアの学内や学外発信は、“考え方の枠を広げる”可能性が約束されていると予想する。

ゆえに、筆者が継続したいのは、筆者の現在の大学教員の折り返し地点として、未来への発信と発展を意識して教育と表現を通じ、人とつながる縁である。卒業生との自主ゼミをずっとオートマチックに継続していくこと。同じ教育理念の同志を、何かの縁のカタチを大切にすることを望んでいる。全ては宇宙の循環と真理にお任せして、自らも教育と表現に精進し発展、拡張することを望むのである。

それについては、次の稿で述べよう。新作「桜と宇宙」の表現の考察から、次の時代への表現研究と教育に拡大していきたい。

5. 謝辞

本稿の執筆にあたり、ご指導頂いた武蔵野美術大学小石新八先生にお礼申し上げます。ありがとうございました。

註

- 1) 筆の穂の水分を絞って描く技法。
- 2) 和紙に刷毛で塗って染める技法。
- 3) 筆のふくらみや勢いをつかい、墨の濃淡で表現する技法。
- 4) 紙や絹などを補強するために裏面に紙を糊で貼ること。
- 5) 掛軸や巻物を仕立てるときに糊気を和らげ巻きやすくするために、裏面全体に蠟を引きガラス等で擦る作業。
- 6) 一枚の紙を繊維の層にしたがって二枚もしくは数枚に剥ぐこと。
- 7) 和紙に絵の具や墨のにじみを止める水溶液を引くこと。
- 8) 絵絹の裏から彩色を施す技法。薄い和紙などにも応用が効く技法である。
- 9) 絵画を支える物質のこと。
- 10) 桃山時代後期から始まり、江戸時代後期に栄えた画派。俵屋宗達から尾形光琳、尾形乾山に継承され、酒井抱一、鈴木其一らが隆盛期を極めた。
- 11) 絵の具が濡れているうちに他の絵の具をたらし込み、絵の具の滲み、濃淡で得る技法。
- 12) 空刷毛を用いたぼかしの技法である。濃淡のみで描かれたぼんやりとした画面のこと。
- 13) <https://aishinbun.com/clm/20181129/1855/?fbclid=IwAR01XN0c9RvWkD57dKGrkYrxUPhcGd0CfUU8NRMaHMSY8ad-Tv88tQig3e0>
- 14) 片山博文／藤崎いづみ(2017)「コラボレーション・アクティブラーニングーリベラルアーツ教育と造形デザイン教育による共同プロジェクトの教育事例ー」桜美林大学『OBIRIN TODAY』第17号

参考文献

- ・VISUAL・ARTS ビジュアル・アーツ基礎 2019 年度版 (2019) p.3-6
- ・東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室〔編〕(2007)『図解日本画用語辞典』(株)東京美術 p.58 p.101 p.103 p.106 p.121 p.156 p.157
- ・原研哉(2013)『デザインのデザイン DESIGN OF DESIGN』(株)岩波書店
- ・監修・鳩居堂(2013)『鳩居堂の日本のしきたり豆知識』(株)マガジンハウス
- ・左治晴夫『からだは星からできている』(株)春秋社(2007) p.38-39 p.41 p.116-117 p.214-215
- ・谷崎潤一郎『陰翳礼讃』中京文庫(2011)
- ・藤崎いづみ(2013)「日本画制作における『桜』の表現の考察ー自作の原点を探る試みー」桜美林論考『人文研究』第4号 p.130-138
- ・藤崎いづみ(2015)「日本画制作における『自然・自然現象』の表現の考察ー自作の原点を探る試みⅡー」桜美林論考『人文研究』第6号 p.123-124
- ・藤崎いづみ(2018)「日本画制作における『自然界・自然環境・宇宙』の表現の考察ー自作の原点

を探る試みⅢ―」桜美林論考『人文研究』第9号 p.207

- ・藤崎いづみ(2014)「フットボールにおける造形美術デザインの表現研究と教育―総合大学における造形美術教育指導の立場からⅡ―」桜美林大学『OBIRIN TODAY』第14号 p.148 p.158
- ・岡田翔(2018)「ワークショップ型映像制作へ、新たな映像表現および映像教育への考察」―長野県信濃美術館における平成29年度文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業での取り組みから―
- ・『没後50年横山大観―新たな伝承へ』(2008) 国立近代美術館 / 横山大観記念館 / 朝日新聞社 p.158
- ・『きまぐれ AI 新聞 AI Weekly』(2018) (株) エクサウィーズ
- ・『見えない光の桜吹雪 (HANA ふぶき) 展 報告書』(2019)

作品リスト

藤崎いづみ作品①『宇宙の花Ⅱ』紙本彩色 91.0cm × 60.6cm 2018年制作

藤崎いづみ作品②『桜色光絵図』紙本彩色 36.0cm × 36.0cm 2018年制作